資料－５

有識者からの発表

「瀬戸内海　中津干潟を教材とした環境学習の現状と課題」

NPO 法人水辺に遊ぶ会　理事長　足利由紀子

今後の瀬戸内海の水環境の在り方懇談会資料

【発表者：ＮＰＯ法人水辺に遊ぶ会　理事長　足利由紀子　】

項　目	内　容
1. 発表テーマ	瀬戸内海 中津干潟を教材とした環境学習の現状と課題
2. 課題	１．環境行政、教育行政が地域の環境学習を推進する体制になっていない ・予算不足・時間不足・人材不足の状態で、現場にたくさんの課題が課せられている。 ・「環境学習」が教育課程の中にきちんと位置づけられていない ・熱心な地域住民と教師のボランタリーな活動によって支えられているという現実 ２．地域がどのように取り組むか ・地域ごとの特色ある自然環境を、どのように環境学習に取りいれるか、また、地域の素材をどのように活用するかなどを、関係者が十分に検討して導入する必要がある。 ・環境学習の重要性やボランティア活動に対する地域の理解を高める必要がある。また、地域の支援体制づくりが必要である。 ３．キーとなる組織や場所、人材が必要である。
3. 対応（提案）	１．政策として取り組むべき　予算面・体制面・人材ほか ２．教育関係者、行政、ＮＧＯなどで地域内での共通プログラムを作る ３．環境学習の拠点となる場所が必要 ４．担い手（指導者）を育てる仕組み作り ５．中間支援を行う組織づくり ６．地域での受け皿のネットワーク化　など
4. 今後の瀬戸内海の方向性について	・郷土の豊かな自然があってこその環境学習であると思う。 そのためにも、瀬戸内海、中津干潟の環境保全が前提である。 ・環境学習は地域の自然の中で子どもたちの心を育てる活動である。 学校やＮＧＯなど、子どもと接する現場の人間のみが取り組む問題ではなく、保護者をはじめとする地域住民、漁業者や水産業者など海で仕事をする人、さらには海を管理する立場にある行政（環境・水産・土木部局）などが、横の連携を作り、ともに協力し合いながら取り組むべきである。 ・海はつながっている。沿岸環境の問題は、山・川・海という水環境のひとつのつながりとして考えるなど、子どもたちには、大きな目で地域の環境を見る目を養ってもらいたい。子どもたちの「科学の目」を育てるためには、十分な体験と時間が必要である。教育課程の中における、環境学習の重要性を再認識し、予算等の措置を十分に検討すべきである。

＊上記の内容で各分野における内容を説明していただき、懇談会委員と意見交換を行います。

瀬戸内海 中津干潟を教材とした
環境学習の現状と課題
足利由紀子(NPO法人水辺に遊ぶ会)

中津干潟
沿岸延長:約10km　干潟面積:約1,347ha　最大干満差:約400cm

カブトガニ
Horseshoe crab

アオギス　Small-scaled sillago

ズグロカモメ　Saunder's Gull

スナメリ　Finless Porpoise

シオフキ
カワニナ
ウミニナ
アカニシ
サルボウ
ハマグリ
アサリ
中津の貝塚（約3500年前）から出土する貝
現在も干潟には同じ貝が生息している

1965年頃の漁業風景

1950年代の海岸風景
貝掘り（潮干狩り）
浜遠足

里海里浜
豊葦原中津國
水辺に遊ぶ会の活動の目的は・・・
海と人の「こころの距離」をとりもどす
途切れてしまった海と人のつながりを結びなおすこと

自然観察会

総合的学習のサポート

調査研究

ビーチクリーン
漂着物調査

漁業体験・食育

川の学習

山と森の学習

環境学習の現状と課題　1

環境行政、教育行政が地域の環境学習を推進する体制になっていない

・予算不足、時間不足、人材不足の状態にもかかわらず現場にたくさんの課題が課せられている

・環境学習が教育課程の中に位置づけられていない

・熱心な地域住民と教師のボランタリーな活動によって支えられている

環境学習の現状と課題 2

地域がどのように取り組むか

- 地域ごとの特色ある自然環境を、どのように環境学習に取り入れるか、また、地域の素材をどのように活用するかを関係者が十分に検討する必要がある
- 環境学習やボランティア活動に対する地域の理解を高める必要がある
- 地域での支援体制づくりが必要である

環境学習の現状と課題 3

キーとなる組織や場所、人材の必要性

・環境学習の拠点となる場づくり

・中間支援を行う組織づくり

・担い手（指導者）を育てる仕組み作り

・情報の収集、発信、地域ネットワーク

・郷土の豊かな自然があってこその環境学習である。
　そのためにも、中津干潟の環境保全が前提である。

・環境学習は地域の自然の中で子どもたちの心を育てる活動である。地域住民、海の仕事に従事する人、行政など、様々な人々が、横の連携を作り、取り組むべきである。

・海はつながっている。沿岸環境の問題は、山・川・海という水環境のひとつのつながりとして考えることが大切。

・子どもたちの「科学の目」を育てるためには、十分な体験と時間が必要である。教育課程の中における、環境学習の重要性を再認識し、予算等の措置を十分に検討すべきである。

環境学習の現状と課題　3

キーとなる組織や場所、人材の必要性

・環境学習の拠点となる場づくり

・中間支援を行う組織づくり

・担い手（指導者）を育てる仕組み作り

・情報の収集、発信、地域ネットワーク